

2017 8/5・20

No. 2745

賃金事情

人事賃金管理の運用をサポートする情報誌

働き方改革と企業での取り組み

政府の進める働き方改革と実行計画の概要 22

解説 「働き方改革」をどう評価するか ——— 日本総合研究所 山田 久 26

解説 働き方改革実行計画の課題 ——— 日本生産性本部 北浦 正行 30

資料 働き方改革施策の導入状況【人事制度等総合調査】—産労総合研究所 36

人事制度 日置電機 40

トレンド トーコン ホールディングス 46

春闘 春闘回答【最終集計】 厚生労働省/経団連/連合/東京都/大阪府/愛知県 12
夏季賞与・一時金回答 経団連/連合/東京都/大阪府 18

特別対談 教養のゆくえ、知のありかた 福間 良明/中嶋 哲夫 52

賃金構造にみる 職業の平成史 第10回 警察官 尾上 友章 62

アルバイト・パートの賃金・求人動向【2017年6月】 木ノ内 博道 60

人事トップインタビュー 56 **インタビューとまとめ** 斎藤 智文 06
カルビー 江木 忍氏「社員の“やる気スイッチ”を押す」

- 連載
- 図説 労働経済 石水 喜夫 51
 - 経営戦略とこれからの人的資源管理 吉村 孝司 69
 - 人事のジレンマ 伊達 洋駆 74
 - 人事のためのスキル向上仕事塾 齋藤 敦 76
 - 人事スタッフのための税知識 金子 尚弘 80
 - 人事に役立つデータの読み方 飯塚 信夫 84
 - 世界を統計でみてみよう！ インドその3 93

労働経済データ 主要指標 2017年6月 86
詳細データ 2017年6月 89

産労総合研究所
<http://www.e-sanro.net>



働き方改革と企業での取組み

安倍内閣が掲げる働き方改革。昨年末には「同一労働同一賃金ガイドライン案」が公表され、本年3月には働き方改革実行計画が出されるなど、さまざまな取組みが進められている。今号では働き方改革特集として、政府の進める働き方改革の概要と、日本総合研究所・山田久氏、日本生産性本部・北浦正行氏の解説、そして、日置電機とトーコン ホールディングスの事例を紹介する。

これからの私たちの働き方はどのように変わっていくのか、各組織や個人に求められる制度・施策、考え方はどのようなものなのかを検討するうえでの参考にしていただきたい。

特別対談 教養のゆくえ、知のありかた



立命館大学産業社会学部 教授

福間 良明

MBO実践支援センター 代表
大阪商業大学 特任教授

中嶋 哲夫

日本の高度経済成長期に底辺で産業を支えた青年たち。その多くが家庭の経済的な事情で中学を卒業して働かざるを得なかった農村部の青少年たちだ。学びたいのに学べないという彼らの鬱屈した思いを支え、心の拠り処となったのが、いかに生きるべきかを問う「人生雑誌」といわれる雑誌である。今号では、著書『「働く青年」と教養の戦後史』をまとめられた福間良明教授と、人事教育コンサルタントの中嶋哲夫氏が、人生雑誌が一大ブームとなった時代とその背景について、そして、これからの知のありかたについて対談する。

貸金事情読者のための
データサービスのご案内▶▶ <http://www.e-sanro.net>

読者専用ページへのアクセスにはパスワードが必要です。詳細およびアクセス手順は、巻末⑤ページをご覧ください。



働き方改革と企業での取組み

	政府の進める働き方改革と実行計画の概要	22
解説	「働き方改革」をどう評価するか	日本総合研究所 山田 久 26
解説	働き方改革実行計画の課題	日本生産性本部 北浦 正行 30
資料	働き方改革施策の導入状況【人事制度等総合調査】	産労総合研究所 36
人事制度 トレンド	日置電機 65歳定年・70歳まで継続再雇用の新人事制度導入	40
	トーコン ホールディングス 残業時間ゼロでも30時間分の時間外賃金を支給	46

春闘回答【最終集計】	厚生労働省/経団連/連合/東京都/大阪府/愛知県	12
夏季賞与・一時金回答	経団連/連合/東京都/大阪府	18

特別対談	教養のゆくえ、知のありかた	福間 良明/中嶋 哲夫	52
	賃金構造にみる 職業の平成史 第10回 警察官	尾上 友章	62
	アルバイト・パートの賃金・求人動向【2017年6月】	木ノ内 博道	60
シリーズ	人事トップインタビュー ⑤⑥	インタビューとまとめ 齋藤 智文	
	カルビー 江木 忍氏「社員の“やる気スイッチ”を押す」		06

【連載】

◎ 図説 労働経済 第5回 問われる成長の質	石水 喜夫	51
◎ 経営戦略とこれからの人的資源管理 (最終回) 第8回 新たな時代に向けての人的資源管理システムの整備	吉村 孝司	69
◎ 人事のジレンマ 第5回 人事評価のジレンマ	伊達 洋駆	74
◎ 人事のためのスキル向上仕事塾 第51回 LGBT採用と定着(LGBTダイバーシティ)の目的と取組み②	齋藤 敦	76
◎ 人事スタッフのための税知識 第69回 副業	金子 尚弘	80
◎ 人事に役立つデータの読み方 第62回 政府より強気?日銀の経済見通し	飯塚 信夫	84
◎ 世界を統計でみてみよう! インドその3		93

◎ 誌面's eye	02
◎ ニュースサマリー 行政&社会 7月の動き	04
◎ 賃金・人事処遇ニュートレンド (6月)	78
◎ 統計資料の公表スケジュール (8月)/ 次号予告	94

労働経済 データ data	主要指標 2017年6月	86
	詳細データ 2017年6月	89





立命館大学産業社会学部 教授

福間 良明 (ふくま よしあき)

1969年、熊本市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士(人間・環境学)。専攻は歴史社会学・メディア史。今年2月、昭和30年代に、働く若者を中心に広く読まれた「人生雑誌」の盛衰を追った『「働く青年」と教養の戦後史』(筑摩選書)を発表した。

MBO実践支援センター代表 大阪商業大学 特任教授

中嶋 哲夫 (なかしま てつお)

1948年生まれ。京都大学経済学部卒業。20年間の企業生活(鐘淵化学工業、現力ネカ)を経て人事教育コンサルタントとして独立。2007年博士(国際公共政策)。主な著書に『目標管理を活かす面接対話活用マニュアル』(経営書院、1998)『人事の統計分析』(ミネルヴァ書房、2013)など。

昨年、イギリスやアメリカで投票行動に影響を与えたといわれるフェイクニュースや、不正確な記事や無断転用が問題となった「まとめサイト」。インターネットを介した情報のやりとりがたやすいからこそ、私たちの真実を見極める眼が問われている。

かつて、日本経済の高度成長期に底辺で産業を支えた勤労青年たちが存在した。そんな彼らの心の拠り所となったのが「人生雑誌」である。昭和史に埋もれた雑誌の存在を明らかにした立命館大学の福間良明教授と、MBO実践支援センター代表の中嶋哲夫氏が、かつての若者が反発しつつも渴望した知的なるものについて、そしてこれからの知のありかたについて語り合う。

集団就職の時代と「人生雑誌」

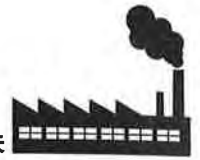
中嶋 今日はお時間をいただきまして、ありがとうございます。何年前に、美輪明宏がNHK紅白歌合戦で「ヨイトマケの唄」を歌って、話題になりましたね(編注:2012年、2015年)。若い人も感動したというようなことを

聞きました。先生の『「働く青年」と教養の戦後史』を読むと、あの歌がもっている、なんとか生活をよくしていきたいという生き方を思い出しました。

勤労青年というと、私は「集団就職」をイメージします。いまはもう、それを体験した年代は定年になっておられると思いますし、身近なところで知っている人も少なくなっていると思います。まず、集団就職とその時代背景についてご説明いただけますか。

福間 中学、あるいは高校を卒業して地方から都心に働きに行く人口移動の現象です。背景の一つには戦後の、農村の状況変化が大きかったと思います。

復員者が戻ってきても、都市には食糧がないので、当然彼らはもといいた農村に帰っていく。そこで一定期間は住み着いて、子どもが生まれたりするわけです。そうすると農村の人口が過剰になります。わずかな田畑を兄弟で均等に分けていくと、1人あたりは当然少なくなりますから、経済的にも先細る。とくに次男、三男らは、農繁期には必要な労働力であった一方で、農閑期は働き口がなく、肩身の狭い思いをしていた。同時に、50年代半ば以降、高度経済成長が始まっていきます。それに合わ



せて、農村から都市部へと労働者が吸い寄せられていきました。

かつ、いまでしたら高校進学率が100%近くになっていますけれども、戦後の5～10年の頃は、高校進学率でも半分にも満たないくらいですから、勉強はできても義務教育で終わらざるを得ない人もたくさんいたわけです。都市へと流れていった人々のなかには、そうした青年たちも少なくありませんでした。

重要なのは、彼らがおかれていた労働環境です。地方のそういう少年少女たちは、仕事先は学校や職安などが紹介してはくれるものの、都市に大きなつてがあるわけでもありません。恵まれた一流企業に就職できるのはごくわずかで、多くの場合は、零細の商店や工場で働くことが多かったと思います。

もちろん戦後には、労働三法が施行されてはいるわけですが、そういう商店や工場は景気の波に左右されやすいですから、当然のことながら労働環境も良くなり、映画『一粒の麦』（1958年、吉村公三郎監督、大映）などでも描かれていますけれども、週休1日と聞いていたのに反故にされたり、超過勤務も常態化していたりしたと思います。

中嶋 そういう状況のなかでも、学習意欲を失わない人たちが相当数いらっしゃった。彼らが、先生がテーマとして取り上げられた「人生雑誌」の読者ですね。私は同世代として経験したわけですが、定時制高校に進学をされた方も数多くおられました。向上心の強い方が多かったような印象があります。

福間 せめて定時制でも行きたいという人はたくさんいたと思います。ただ、就職先で行かせてくれたのかというと、行かせてやると言っている、あとで「アカン」と言われたり。

中嶋 そういうのが結構あったみたいですね。

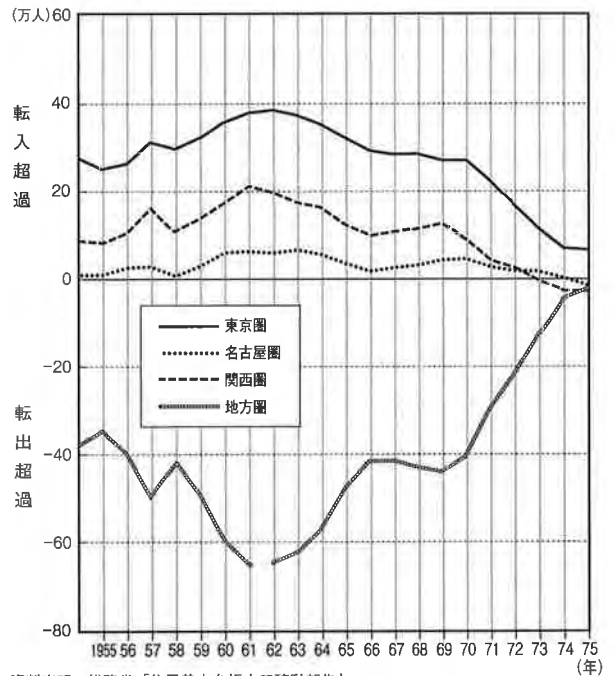
福間 ええ。実際に行けたとしても、8～10時間働いて、それから学校に行って、また復習するというのは、相当な意志の強さが必要です。精神的にも肉体的にも相当な負荷がかかる状況であったと思います。

同時に、定時制にも行けない層もいたわけです。そういう人たちの拠り所が、私が取り上げた「人生雑誌」だったのかなと思います。たぶん、いまの人たちには、雑誌のイメージがわからないと思いますが、大学知識人や評論家の哲学や文学について書かれた文章が載る一方、読者も生活のことや社会に対する思い、文学に対する思い

人生雑誌

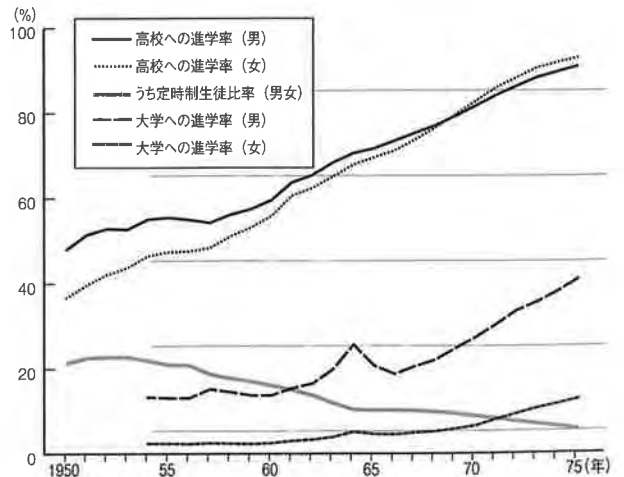
高校などに進学できなかった青少年層を主要読者とし、「いかに生きるべきか」を主題とした雑誌の総称。知識人による人生論や古典などの紹介のほか、読者の手記や投稿を広く掲載していることが特徴。主なものに『葦』（1949年創刊、葦会）、『人生手帖』（同1952年、文理書院）などがある。1950年後半に高揚期を迎え、発行部数はそれぞれ8万部に迫る。その後、高校進学率の急増やレクリエーションの多様化など、読者層の変化とともに衰退し、1975年頃には終刊を迎える。

図1 各地域の転入超過数の推移 1954～1975年



資料出所：総務省「住民基本台帳人口移動報告」
注・地域区分は次のとおりで、各都道府県の数字を単純に合計した。
東京圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）、名古屋圏（岐阜県、愛知県、三重県）
関西圏（京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）、地方圏（上記以外の県）

図2 高等学校・大学への進学率 1950～1975年



資料出所：文部科学省「学校基本調査」
「定時制生徒比率」は高校総生徒数に占める定時制課程生徒の割合
参考文献：上田利男著『夜学』（人間の科学社）



みたいなものを、ちょっとした論説文や小説みたいなものを書いて投稿するという雑誌でした。そういう雑誌に手を伸ばしていくという層は、一定数いたと思います。

中嶋 私はたまたま高校時代に「人生手帖」という雑誌を読んでいたのですが、記憶をたどると、常に自分が生きている場と社会科学とがつながるような書き方をされていたような、純粋学問というよりも、もう少し身近な学問という気がします。

福間 おっしゃるとおりだと思います。ある程度、読者たちの生活状況を念頭に置いた人生論みたいなものや読書案内など、そういうものが多かったと思います。

中嶋 何部くらい売っていたのでしょうか。

福間 「人生手帖」と「葦」が二大人生雑誌ですが、ピークのときは、それぞれ8万部くらい出ていました。

中嶋 なるほど。回し読みもされたでしょうから、50万人くらい読者がいたということですね。かなりの数です。

福間 そうです。人生雑誌を研究対象とするにあたり、なぜ、そういう学習意欲があったのかという点が、興味があったところでして、次のような背景があったのかなと思います。

一つは読者共同体の存在です。いまふうに言えば、雑誌をとおしたつながりや絆とかコミュニティという言い方になるのではないかと思います。とくに中学で成績が良かったような人たちでしたら、上の学校に行けなかった悔しさで相当なものだったと思います。でも、職場では、「そんなことはどうでもいいから、とにかく仕事を覚えろ」と言われる。仮に年齢の近い先輩がいたとしても、彼らも黙々と仕事をしているわけですから、必ずしも悔しさを共有できない状況だったのではないかと思います。

そうなってくると、自分の思いを言葉にできないもどかしさのようなものが募る。そういうとき、たまたま書店で人生雑誌を手にとって、「これだ!」と。それは、同じような悩みを抱えた人々と直接会うわけではないけれども、雑誌をとおした見えないコミュニティといえますか、そういうものが生まれていったのではないかと思います。

実際、読者からの投稿も多かったですし、誰かの投稿に対して、別の人が意見を言って誌上で議論されることもありましたので、いまでしたらSNSのような側面も部分的にはあるのかもしれません。

中嶋 ちょっとシンボリックな言い方になりますが、坂本九の「見上げてごらん夜の星を」(1963年)の、「夜の星」に相当したのが人生雑誌だったような感じですかね。社会の隅で1人働いていても、ほかにも同じ思いを抱いている人がいる、という感覚なのでしょう。

福間 そうですね。ちょっと脱線するかもしれませんが、メディア研究をするうえで重要なのは、そこに書かれているものかどうか、言われているものではなく、その雑誌がどういう働きをしているのかだと思います。これが狭い意味でのメディア論のベーシックな考え方です。人生雑誌の場合は、もちろんそこに書かれていたことも大事ですけども、それを頑張って読んでいる先に同じような読者がたくさんいて、読者欄や誌面などをおして、お互い意見のやり取りができる。あるいは実際に自分が投稿をしなくても、そういう“つながり感”が雑誌の先に透けて見えると言いますか、そういう機能があったのではないかと思います。

強烈な自負心が支えていた学習への意欲

中嶋 先生がおっしゃっているような時代を描いているのが、映画『キューボラのある街』(1962年 浦山桐郎監督 日活)ですね。私の世代のヒロインである吉永小百合が主演を務めています。最近でいうと『ALWAYS 三丁目の夕日』(2005年 山崎貴監督 東宝)が、ちょうどその時代を描いています。確か、あの映画でも自動車工場へ集団就職した登場人物がいたような気がします。

そのころの働き方を少し教えていただけるとありがたいです。

福間 都市に出てくる人たちの問題の一つは住むところです。アパートを借りようにも、彼らの給料からすれば、とても高くて借りられないし、都心に親戚がいる人もほとんどいません。寄宿舍や寮がある企業も高度経済成長期の初期には限られていました。ましてや零細の商店や工場でしたら、寮なんてのぞめません。つまりは雇用主のところに住まわせてもらう、住み込みで働く数が相当多かったと思います。

個室をもらえればまだよいのですが、状況によっては雇い主の家族と一緒に寝起きしなければならず、息苦しかったと思うのです。どういう本を読んでいるのか、どういうことをやっているのかを常に監視されているよう



な状況です。仮に自分の部屋をもらえたケースでも、頑張って勉強しようとする、「電気代がもったいないから早く寝ろ」みたいなことを言われる。

さらに、同じ家で生活しているがゆえに、雇い主の私的な家事労働を強いられることもあります。雇用されている立場であれば、いくら不本意であっても、なかなか断れませんから。

中嶋 雇用労働なのか年季奉公なのか分からない、その過渡期くらいの感じの働き方が多かったのでしょうか。そうすると、雇われた相手次第で境遇がガラッと変わってしまうような環境だったわけですね。

福間 零細企業は、経済環境の変化の調整弁に使われていたところがありますから、景気がいいときにはやたらに残業。どんなに無理を言われても大企業の注文に応えなければいけない。そして景気が悪くなったらまったく仕事がなくなってしまうという、そういう状況でした。そういうところで住み込みで働いていると、雑誌を読むのも人の目を気にしなければならなかった。

とくに人生雑誌は、いわゆる労働運動とかマルクス主義的な文章も掲載されていましたから、「なんで、そんなものを読んでいる」と、解雇されたりすることもありました。読者たちはそういう状況のなかで、雑誌を読み、そこに投稿することで、「学歴がある連中よりも俺たちはこんなに頑張っている」という自負が生まれていたわけですね。

中嶋 私が若い頃に工場で働いていたときには、中卒の課長さんや高等小学校卒の課長さんが何人もいらっしゃいました。こういう方々に共通するのは、とにかくよく国語辞典を開かれること、それと人格者であること。あとはやっぱり、仕事をよく知っていらっしゃる。

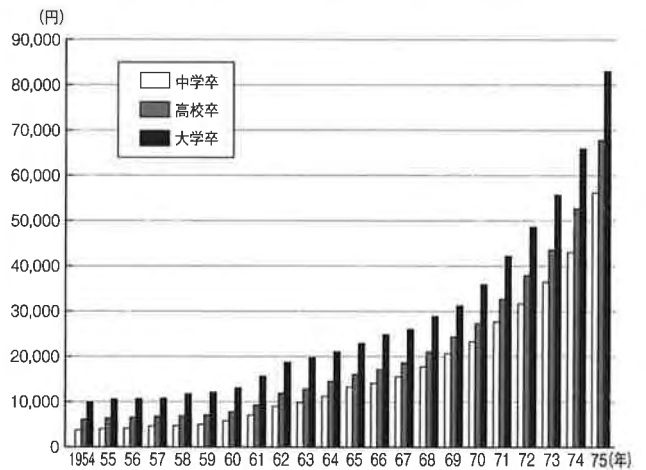
国語辞典を頻繁に引かれるということは強い印象が残っていて、人間が学ぶときの基本って言葉なんだなあ、言葉を学ばないといけないのだなあということを、若い頃に教えてもらったことを思い出します。

福間 人生雑誌の読者たちは、一生懸命サルトルに触れたり、トルストイに言及したりしていたわけですが、それは上の学校に行けなかったことへのコンプレックスみたいなものが、「俺は学校に行かなくてもこんなことを理解している」という、そういう強烈な自負と結びついてたからです。逆にコンプレックスと自負の表裏一体のメンタリティみたいなものが、とにかく「読む」という行為に駆り立てていたのではないかと思います。

集団就職

1950年代以降、日本経済は高度経済成長期に入る。都市部の労働者として、従順で単純労働を厭わず、賃金も低く抑えられる新規中卒者に需要が集まった。大手の工場が都市部の若年労働者を多く採用したことにより、零細な工場や商店はやむを得ず、地方に人材を求めることになる。そこで始められたのが「集団求人」（集団就職）であった。1954年に東京都渋谷公共職業安定所が新潟県高田の安定所と連携して集団的な職業紹介を行ったのが初めといわれている。春になると教師らに引率された地方農村部の新規中卒者たちは、臨時列車に乗って都市部の勤務先に赴いた。ピーク時の1964年には、集団就職者は35道県から7万8,400人に及び、延べ3,000本の集団就職専用列車が運行された。

図3 新規学卒者の初任給 1954~1975年



資料出所：労働省「新規学卒者初任給調査」

東京都区部の小売物価 (1955年)

ワイシャツ (混紡) 1枚	579 円
男子靴 (牛皮) 1足	2,577 円
洗濯代 (ワイシャツ) 1枚	33.7 円
新聞代 (朝夕刊、月ぎめ) 1か月	330 円
入浴料 (大人) 1回	15 円
ビール 1本・633ml	125 円
映画観覧料 (大人) 1回	133 円
理髪料 (大人) 1回	154 円
高校授業料 (公立・全日制普通課程) 1か月	500 円
家賃 (民営・借家) 1か月1畳	181 円

資料出所：総務庁統計局「小売物価統計調査」

中嶋 中卒で課長さんをやっておられた方は、私に対して、おそらく複雑な気持ち、半分喜びつつ、半分「この野郎、仕事もできぬのに」と思いつつ、教えておられたのだらうと、いまにして思います。ただ、そんなことがわかるような新入社員ではありませんので、とにかく教えてもらってありがたい、わからないことがあれば、この人のところに聞きに行こうと思っていましたけどね。

福間 1960~70年代になってくると、高卒はもちろん大



卒の人もたくさん職場に入ってきて、中卒とか高小卒で働いていた人が中間管理職とかになってくるわけですから、その立場ゆえに、きちんとした言葉遣いで仕事をしなければいけないという自己規律といいますか、そういったものは確かにあったと思います。

家族のなかに同居する 学歴エリート層と非エリート層

中嶋 人生雑誌を読んでいた若い人たちは、生きるためには学ぶしかないところに追い込まれていた人たちのようにも見えます。先生は研究されていて、何か感じられるところがありますか。

福岡 集団就職をした人みなが、というわけではないかもしれませんがけれども、おそらくその中の一定数、少なくとも人生雑誌の読者たちに共通していたのは、「読書を通じた人格陶冶」といいますか、そういう価値規範だったように思います。

仕事の技術を身につけることは大事ですが、それプラス、儲けるためのテクニックとか、そういう意味での生き方ではなくて、儲かるかどうかは別にして、本当の生き方、本当の人生とはなんだろうみたいな、そういうことを必死に模索していたのかなと思います。それはある意味、自分をどう高めていくのかという、強烈な自己向上の意欲だったのだと思うのです。

それは、くわしくはないですが、いまの資格ブームとか自己啓発の本などでみられるものとは、スタンスが違うような気がします。自己啓発本はどちらかというと、「いまのあなたのままでいいですよ」という自己肯定を積極的に後押しするような論理だと思うのですが、そうではなくて、自分に不足しているものを常に自分に突きつけて、どうやってそれを埋めて自己を高めていくのか。そのことが、「大学に行くために高校に行ったやつ、あるいは大学に行っていないところに就職することしか考えていないやつよりも俺のほうが上だ」、という気持ちを支えていて、人生雑誌の読者たちを人文社会系の読書に駆り立てていったのかなと思います。

もう一つは、読者サークルに参加されていた方から聞いた話ですけど、当時は労働組合活動が盛んでしたから、職場の中で労働運動の理論、たとえばマルクス主義のことなども話題になったりしたそうです。入社5年目にもなると、後輩に教える立場になってきますから、必

死に勉強しなければならず、人生雑誌に載っている労働運動関連の記事や社会時評を読んだりされたそうです。これはここ数年前からの資格ブームとは若干異質なところがあるなと思います。

中嶋 そうですね。

サラリーマンをやっているときに不思議だったことの一つで、私のいた会社では、定年退職者に社内報であいさつしてもらうのですが、その際に「大過なく過ごせたのは皆さまのおかげです」ということと、「人間として成長できました」という、この決まり文句は絶対入るんですね。若い頃は真意がわかりませんでしたね。みんながこう書くから「長くサラリーマンをやると自分の言葉を話せない」と生意気にも考えていました（笑）。

ただ、自分が40歳くらいになってから、なんかこの言葉の重さを感じ取れるようになりました。これが「この人の人生なんだ」と思うようになって、それは、周りの人の助けがあればこそという、理屈っぽく言えば互酬関係みたいなものをきちんとわかってくるということなのかなあ。

たぶん、集団就職した人たちは、自分のために働いていたのではないのでしょうか。国元の親兄弟の事情のために働いているというところがあって、自分のためだけに上の学校に行っているやつに負けてたまるかというような感じがしますね。

福岡 そうですね。自分は働くけれども、弟たちは高校に行かせたい、大学に行かせるみたいなことは当然ありました。

この本を、知り合いの、中嶋先生の世代よりももう少し上の方で、ある方面の歴史研究の大家の先生に献本したところ、長いお礼状をいただきました。その中に、先生のお兄さんのことが書かれてありました。お父さんが早くに戦争で亡くなり、お兄さんはおそらくとても成績のよい方だったようなのですが、大学への進学を諦めて、地元の特設郵便局で働いたのだそうです。自分の夢はそこでいったん諦められて、弟さんたちの学費を支援してくれたとのことでした。それでも、家族の目につかないところで、ひっそりと悔し涙を流されていたこともあったそうです。そうしたお兄さんの姿を思い出した、と書かれてありました。

いつも怖い先生だなんて思っていたのですが、そんな話を聞くと、改めて当時の人々の思いを感じるところがありましたし、学歴エリート層と集団就職の層、二つの層



特別対談 福岡良明×中嶋哲夫

に二分されているわけではなくて、一つの家族のなかに同居していることがあるというのが実感されましたし、重くいろいろ考えさせられました。

中嶋 そうですね。以前、私は大手生命保険会社で自伝史を書くという研修をしたのですが、課長さんたちのなかに高卒の人がいっぱいいらっしゃいました。優秀な方たちなのですが、弟だけは大学を出てやりたいと思って、商業高校を出て生命保険会社に就職したという方たちです。当時、中卒で養成工（企業内の学校）という形で大企業へ入られた方も大勢いるはずですよ。そういう方々が高度経済成長期にずいぶん貢献されたのだと思います。

福岡 この本を書くときには必ずしも気が付いていなかったのですが、ある意味、階級史観ではないですけども、エリート層とノンエリート層がまったく分かれていたわけではないというのは、戦後社会を考えるうえで重要かと思います。二つの層が反目し合っているのでは必ずしもなく、集団就職したような層が弟さんを大学に行かせたり、あるいは自分の子どもを大学に行かせたりという、そのことは60～70年代以降の大学進学率の上昇にもつながってくるわけですけども、そこは見落とすてはいけないことだと改めて思いました。

中嶋 教育が階層移動を促す手段として十分生きていた時代ということなのでしょうか。

福岡 そうですね。逆に、70年代、とくに半ば以降になってきますと、成績の優劣がどこまで進学するかを規定する、そういう一般常識ができてきた時代だと思います。裏を返せば、その前は、進学できない理由は必ずしも学力の問題とは見なされていなかったと思います。

だからこそ、「俺は中学しか行けなかったけれども、勉強するんだ」というモチベーションをもち得たのだと思うのです。それが70年代以降になってくると、高校進学率が7～8割を超えてきますから、上の学校に行けないのは成績が悪いからだ、必ずしもそうとは限らないのですが、そういうイメージが作られてきます。お金がなくて上の学校に行くのを断念したのだけれど、どうせ行けないのなら勉強しないという、予言の自己成就（注）といえますか、そういう時代になったのではないかと思うのです。

こうしたなか、教育がかえって階層を固定化し、再生産していくように変わっている。しかし、戦後の初期はそれとは若干違う状況があったのだという気はします。

（注）予言の自己成就（self-fulfilling prophecy）：アメリカの社会学者マートン（Merton 1957）が指摘した現象。たとえ誤った予言であっても、人々がそれを正しいと信じると、その予言が本当に実現してしまうこと。

中嶋 そう思います。経済の状況も要因だと思いますけれど、復活・チャレンジしやすい時代だったのは確かだし、キャリアの成功パターンがいくつか作れた時代でしたよ。

現実を超える知のありかた

中嶋 話はちょっと変わりますが、実は私、歌が好きなので、集団就職という必ず思い出すのが「あ、上野駅」なんです。

福岡 エッセイ（編注：本誌2017年4月20日号「人事も歩けば」）にも書かれていましたね。

中嶋 あの歌詞の中に「くじけちゃいけない人生があの日ここから始まった」という表現があります。いまのキャリアなんかを論じているときに、「くじけちゃいけない人生」というような表現は出てこないですよ。

くじけちゃいけない人生という言葉が、なぜ集団就職のテーマソングと言われるところまで受け入れられたのかというのは、なんとなくわかる気もするし、不思議な感じもします。私の解釈は、集団就職の人たちというのは、その時点で何かを背負っていて、何かの問題を解決するために自分が働くと考えていたのだろう。そういう意味では、自分自身の社会的な役割というのを、ある程度は考えていたのではないか。それは自分が置かれている環境がもつ制約を受け入れるという潔さでもあったのだろうと思います。

いまの若い人を見ていて気になるのは、自分の制約条件をよく見ていないというか、見つけられないというか、そういう制約を受け入れる潔さみたいなものを感じるケースがずいぶん減ってきたような印象をもつのです。そのことが何かを決めて出発する能力の弱さ、つまり「生きる力の弱さ」につながっているように思います。先生、そのあたりはどのように思われますか。

福岡 二つの側面があるのではないかと思います。一つには、まさに上の学校に行くことを諦めたりとか、その制約をいったん受け入れて、腹をくくって仕事をし、可能であれば人生雑誌なり定時制で勉強をするという人



たち。ただ他方で、制約を受け入れつつも、納得できない感じがどこかには残っていて、それで何かを読んだり、それこそ社会科学への関心が広がっていったりというところはあったのではないかと思うのです。

なぜ、こういう環境に置かれているのだろうかということは、労働問題への関心に結びつきますし、当然マルクス主義の関心へもつながっていきます。同時に、人生雑誌などを見ていて気づくのは、社会問題に関する記事もたくさん掲載されているということです。原水爆禁止運動ですとか、50年代の半ばでしたら、まだ沖縄は米軍統治下でしたので、沖縄の土地闘争みたいなものも大きく扱われていました。

ですので、自分の生活の島に閉じこもるのではなくて、もっと大きな社会を構想していこうとする。それは、日常生活ではいったん制約を受け入れるのだけれども、そこへの納得できない感じが、目先の仕事だけではなくて、もっと大きな社会を考えていくようなところにつながっていたのではないか。いまの仕事は頑張りながらも、社会そのものをどう問うていくのかという思考です。

デモクラシーとか市民社会を支える基盤はそういうところであるべきですし、自分の目先の状況さえ変わればいいというだけではなくて、大きな文脈の中で社会をどう考えていくのかということが大切だと思います。人生雑誌の読者たちの教養志向も、そういうところからも生まれていたのかなという気がします。

もちろんいまの若い人たちにもそういう人は少なからずいるとは思いますが。けれども、多くの学生は、もしもそのときの保険として資格を取ったり、3月の終わりになったら就職活動一色になってしまったりしますし。

自分の生活の安定や実利をどう獲得していくのかは、重要な問題ではあるのですが、同時に日常に安住するだけではなくて、これからは選挙権もあるわけですし、数十年後には社会の担い手になるわけですから、もっと日常を超えた社会をどういうふうと考えていくのか。そこは、“人生雑誌の時代”との対比で考えるところがありました。

中嶋 人生雑誌の読者層が、自分に与えられた制約をいったん潔く受け入れたうえで、それを乗り越え、教養を身につけて人格陶冶をしようというような動きがあったとすると、いまの時代というのはその制約を制約として受け入れる潔さがちょっと足りない。このへんになると年寄りの説教だといわれそうですが(笑)。

ただ私が、普段接する企業人を見ていて、40歳過ぎている企業の管理職が、この会社で骨をうずめる以外の生き方の選択ができないのに、そういうふうには構えていない人も多く、そのことに、すごく驚きますね。

バラ色の夢が描けなくても、なんとかそこにコミットした生き方を集団就職世代の人たちから、私は学ぶべきではないかなと思うのです。それは過疎地で村おこしをやっている人たちとも一緒だと思うのです。そういう生き方が少し弱くなっているように思えてならない。

福岡 そうですね。

中嶋 現実的にコミットしていく力の強さというような尺度で見たときに、現実的にコミットメントして、自分の人生をこう作るということが言えないと、たぶんクリエイティブなものが生まれてこない。そういう、現実的にコミットしてくれる人が数多くいることによって、社会というのは成り立っていることを、もう一回思い出しておくべき時期のような気がしています。

自論をかなり強引に言ってしまうている感じはあるんだけど(笑)。

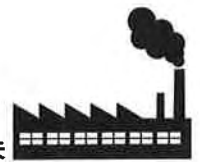
福岡 いやいや(笑)。私自身も思うところがあって、もちろん人々の精神的な問題への関心もありますけれども、なぜそれが生み出されているのかという、社会の構造化したいところに関心があるのです。それを僕は、どんなふうにと考えたらいいのかなと思っています。

その会社で一蓮托生のつもりで過ごせるのも、ある意味その企業の安定性が見込めているからだと思うのです。

中嶋 そうです。

福岡 90年代以降、私のなかでは山一証券がつぶれたのが衝撃的な出来事だったですし、あとはシャープや東芝もこういう状況になっていますから、仮に大企業に就職したとしても、かつて大企業で働いていた人たちの安定感とは、また違うのではないかと思うのです。ですので、とくに40代とかになって、経営破綻なんてことになったらどうしたらいいのだろうという懸念はあると思います。本来仕事って、よその会社でも通用するような職務って限られていて、必ずしも汎用性があるわけではないですから、それでいいのかという不安は確かにあるのかなという気がします。

ですので、先生がおっしゃったような変化があるとしたら、確かにそれはいまの中年層あたりの、精神的な問題であるのと同時に、それを生み出している社会とい



特別対談 ● 福間良明 × 中嶋哲夫

ますか、そこにも何らかの関わりがあるのかと思います。

その意味で集団就職のことを考えると、ノスタルジックに懐古するのではなく、その背後にどのような社会的なひずみみたいなもの、経済成長期の二重構造などといったものが絡んでいたのかという両面で見えていかなければと思うところです。

人生雑誌の読者たちは、確かに前向きに、教養であったり仕事であったりを頑張っておられたわけですが、それは単なる前向きさではなくて、その前向きさをぶっ壊してしまうほどの、ぐちゃぐちゃの社会状況みたいなものが存在したわけです。そこで見るべきは、彼らの意志の強さだけではなくて、悲痛なまでに教養を求めざるを得ないような社会構造だと考えています。そのことが、いまの社会のありかたを鏡としてとらえ返すことにつながるのかなという気がします。

中嶋 いまの社会は専門性が強調され過ぎて、教養が無視されている時代と言えるのかもしれませんがね。

福間 そうですね。裏を返せば、教養が無視される時代になったがゆえに、断片的な専門性みたいなものがもてはやされているといえますか。

かつては大学生が、片手には週刊少年マガジンを持ち、もう片手には読んでいのかどうかは別にして、哲学書くらいは手にしていた。何かそういう単語くらいは喋れなければという、背伸びの規範みたいなものがあつたと思うのですけれど、そういう意味での教養主義みたいなもの

のって70年代以降になってはありませぬし、私の大学生の頃なんて全然そういう空気はなかったですから（笑）。中嶋 ですよ。

福間 そうなつてきますと、何かメタレベルの物事に関心をもち続けて、その意味で自分の目先の範囲を超えた、社会や人文科学的な生き方とか、心理でもいいですけど、そういったものへの関心という発想がなかなか出にくいと思います。

さらに、自分が実生活を営んでいくための資格や専門性、あるいは知そのものが専門分化されていきますから、かつての教養主義的な価値規範は、ますます説得力をもたなくなつてしまふ。そのことも、何か人々の意識の変化につながつていたのかなというふうに思います。

中嶋 私なんかは教養主義の最後の世代かもしれません。岩波文庫が何冊本棚に並んでいるかを競つていた。

福間 かつての大学生について、よく言われる話ですね。中嶋 そのとき身についた、支離滅裂に本を読む傾向というのが、一生治らぬまここまで来ました。

福間 うちの父親が実家にある本をくれるって言って、段ボールを見せてもらったら、やっぱり岩波文庫がいっぱいありました。哲学なんかに興味ないだろうという感じだったのでですけど、少なくとも、買って持っていた。そういう価値規範があつた時代なのかなと思います。

(2017年6月10日立命館大学衣笠キャンパスで採録)

対談を終えて

中嶋哲夫

集団就職は、昭和30年代に日本が体験した農村から都会への大規模な労働移動です。当時、中学卒の地方出身の少年・少女は金の卵と呼ばれました。その後、進学率が上昇し、労働移動は高卒段階、大卒段階となりましたが、都会への人口移動が続いています。限界集落は、集団就職以前の世代が残り、それ以降の人々が残っていない集落。そうとらえれば限界集落と集団就職は裏表の関係です。しかしその割には、集団就職が日本社会に与えた影響の研究は進んでいないようです。福間先生の著書は、その意味で貴重です。

対談のあいだ、「中間層の向上心が競争力の源」になる、という思いがずっと浮かんでいました。学歴エリート層と集団就職の層が社会的に分断されているのではなく、接続している。そこに競争的な向上心が生まれ、職業能力の形成と人間形成につながる。日本の製造業の競争力を支えた現場の人たちは、その向上心を所持していたのではないだろうか。その向上心に応えたのが企業内の教育の仕組み。典型的には小集団活動や改善提案といった仕組み。「現場たたき上げの管理職」を生み出し、そ

の人たちが学卒エリート層によい影響を与えるとともに、学習の効果を多くの従業員に見せる。それらは、厚みのある人材育成の仕組みになっていたと思います。

90年代以降、人材育成の関心はエリート層の育成に傾斜しています。次期幹部やコア人材の育成などです。ところが、現実には、その候補者プールが縮小した可能性があります。自分中心に物事を考えるため、視野が狭く、ミッションを考える力が弱い。専門スキルだけが蓄積され、経営への見識がない。それゆえ、エリート候補者として物足りない。そんな人材が増えていないでしょうか。

自分の働く環境が自分に与える制約を潔く受け入れる。そして、それを打開する方策を考える。そのために、人間形成を行い、職業能力を高める。当たり前のことをいっているに過ぎないかもしれませんが、損得抜きでそれをやろうとする人材こそ、貴重な人材です。社会の中間層がもつ向上心が分厚く存在すること、それこそが競争力の源泉となる。集団就職世代から学べきことのように思います。